

---

# 導かれし者が幻想入り lock pass meseege.

澄田 康美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

導かれし者が幻想入り lock pass message .

### 【Zコード】

Z5902Z

### 【作者名】

澄田 康美

### 【あらすじ】

とある青年と妖怪の存在は、幻想郷にどのような波紋を立てていくのか。幻想郷の過去を舞台に、一人の数奇な旅が始まる…！

## プロローグ（前書き）

### 諸注意

この話は東方の二次創作イメージよりも、オリキャラ+オリ小説のイメージの方が強いです。まああくまで幻想郷な訳ですから、しつかりと東方キャラも出していきたいです。ではどぞ。

## プロローグ

### プロローグ

都会の夜は、明るくてもどこか冷たい感じがする。皆自分の事で手一杯なので、心から他人を思いやつたりする余裕がないのだろう。

そんな冷たい世界に、異端とも言える生き方をする者がいる。

その者の名は人橋 浮世。ひとばし うきよ若いが立派な社会人である。

彼は、友人や家族、大切にしている者などの為ならばどんな事も惜しまない、自己犠牲をモットーとした人間なのである。

夜の街で彼は、警備員の仕事を真っ当し、今丁度、家へ帰る途中なのである。

住宅街を楽しそうに歩く浮世。その理由は携帯で彼女とメールのやり取りをしていたからだ。

若いだけあって軽快にやり取りをする浮世。返信を待つ時間すらも、彼にとっては至福であろう。

だがいくばくかのやり取りをしている内に、一通のメールが彼の顔、いや、彼の全身から至福を奪つていった。

その一通のメールとはこれである。

「ごめんなさい。別れまし

よ。

何の事はない。彼氏彼女ではありがちな別れのメールである。

面と向かって書つ必要のなくなつた現代社会に置いて、この一言を伝えるのはとても楽だろ。

だが、送られた方はただ悲しみに打ちひしがれるしかない。

浮世は鬱憤とした気持ちを携帯を投げてせらに落ち込ませ、自分の家に帰つてベッドの枕に顔をうずめた。ベッドは涙で自然と濡れていた。

どうしようもないやるせのない気持ち。もう寝る時間なので寝る事もできない。

少しして、ベッドにいても仕方ないと判断した浮世はリビングにてレビュをついた。

時間とチャンネルが悪かったのか、テレビはザーッとした砂嵐しか移つていなかつた。

浮世はチャンネルを変える事もなく、なぜかテレビの画面に手を伸ばした。一種の現実逃避状態になつてゐるのであら。

その時であつた。手を伸ばした瞬間にテレビの画面が変わり、緑の森が見える景色に変わつたのだ。

現代ではお田にかかる事はあまり出来やしない景色。浮世は自然とその景色に惹かれた。

浮世は手を伸ばし続け、気がつけばその手はテレビの画面にまで届いていた。

だがその手は画面に触れるような形ではなく、その画面の中にでも入るかのように手がその画面を貫いていた。いや、むしろ画面がまるで水のようになっていたのだ。

軽い自暴自棄になつてゐる浮世にとつて、これは現実なのか夢なのか判断できていなくなっていた。

多分夢だらうなとおもつたその瞬間、浮世がその部屋から突如姿を消した。

誰一人いなくなつた部屋で、テレビから元の砂嵐の音だけがただ鳴るだけであった。

## プロローグ（後書き）

### 後書き

みなさんこんにちわ（こんばんわ）。三人一緒に幻想入りでお馴染みの方がいるのかわかりませんけどお馴染みのつもりの澄田です。

今回はプロローグからじつかり書いてみよつと思いまして、こんな形になつたのです。

きつかけは友達のバクテリアさんから言われた、「お前に過去編を作る許可を出そつ」って一言です。

実は言つと過去編はこれとは違つ物も考えていたんですけど、その場合は10年程度の昔ですのでもうつとなあつて思つたんです。ぶつちやけますといの話は三人一緒以上に行き当たりばつたりです。本当です。

オリキャラがかなり重しないので、正直東方の一次創作って感じはしないかもしません。

まあプロローグだけではまだわかりませんね。なので第一話ではつきりと言いたい事がわかると思います。

ノリとしては、ガンダムSEEDアストレイみたいな完全外伝に近いので。

では、第一話をお楽しみに。

## 第一話 大妖怪との出会い

### 第一話 大妖怪との出会い

鳥のさえずりと木漏れ日の差し込む森の中で、浮世は大の字になつて意識を失つて倒れていた。

さえずる鳥の一匹が浮世の鼻頭に止まり、浮世を起こすかのよつて鳴いた。

その声に浮世がゆっくりと瞼を開けた。鳥と田が合つた瞬間、鳥はぱつと飛び去つていった。

上半身を起こし、辺りを見渡した。どこをどう見ても木がただ連なつていた。

自分がなぜこいつなつているのか・・・浮世は何一つ理解する事は出来なかつた。

立ち上がり、当てもなく浮世は歩き出した。前向きな性格なので、絶望する事もなく歩いていつた。

少しして、浮世は運良く道らじに道に出た。そして今度はその道を歩き出した。

ただただ続いている森の道。現代にこんな道があるのだろうかと思ひながら、浮世は歩き続けた。

歩く中で、浮世はある事を思い出していた。テレビで見たあの映像である。

現代ではあまりない自然の織り成した芸術。考えてみればこの道はあの映像の中にあつてもおかしくはない道だ。

だが、なぜそんな風景の中に、この俺がいるんだ？あれはあくまで映像のはずだろ？

そんな自問自答に、ある答えが出てきた。夢だと想っていたあの現象である。

もしや俺は、あのテレビから映像の世界に入った・・・とても思えばいいのか？

夢だと思っても、今まで歩いてきた中で紛れもなく残っている疲れと、ふとした痛みは、夢ではない事を浮世に告げた。

じゃあ俺は、一体どうなるのだろうか・・・

これからどうなるのかわからない自分自身。だがあくまで浮世は前向きである。何があろうとも前に進んでいれば何かにたどり着くだろ？と不安になっていた心を奮い立たせた。

長い道を歩いて、浮世の前に滝つぼが見えてきた。  
丁度喉が渇いていたので、浮世はその滝つぼの透き通るよ／＼に綺麗な水を使って飲んだ。

喉の渇きを潤し、浮世はその場で休息を取る事にした。色々な事があつたのと疲れからである。

ごろんと横になって頭に手を回し、空を見た。小さな雲がいくつかあるが快晴の空である。

ここに来るまで、浮世は今だに誰にも会っていない。その事は浮世の心に少しの不安を残していた。

もしかしたら、映像の世界には人一人いないとも言つのか？

ありえない状態である今の現状。浮世の持ち前の前向きさを持つてしても今の現状に不安は出来てしまつ。ただぼーっとして休んでいると、浮世の頭の中にある言葉が飛び込んできた。

お願い・・・泣けない・・・来

て・・・

誰かが助けを懇願するような言葉。浮世は驚き以上に、その言葉を誰が送ってきたのかが気になつた。

浮世の持ち前の正義感は、今の彼を動かすのには十分過ぎたのである。

浮世は誰かも知らない、言葉を送ってきた誰かの元に行こうと立ち上がつた。

しかし、冷静に考えれば、どこから送られてきたのかわからない以上、浮世にはどうにも出来ないはずだ。

だが浮世は、まるでそこにはとわかつてこいるのかのように、滝の方へと向かつていった。

浮世が滝の裏を覗くと、その裏には長く暗い洞窟が続いていた。蝙蝠ぐらにしかいそうにない洞窟を、浮世は迷う事なく進んでいった。足元すらおぼつかないはずなのに。

恐らく浮世は、誰かもわからない者の助けと思える言葉を信じているからこそ、ここまでできるのであつた。

じぱりくして、浮世は洞窟の少し広い所に出た。そこは天井から少

しだけ日が差していたのでもまだ明るかった。

水の滴る音が洞窟内で響く中、浮世はある物に目が留まつた。

それは、額に御札が張られ、両手を錠と鎖で繋がれ、まるで聖書に出てくるキリストのよう、洞窟の奥に貼り付けにされていた者だつた。

浮世は得体の知れないそれを見た時、心の中になつたわだかまりを確信へと変えた。

さつさと俺を呼んだのは、さつといつだ。

根拠などあつはしないのに関わらず、浮世はその者へと近づいていった。

近づいていく内に、その者の特徴がどんどん見えてきた。髪は腰辺りの長さ。服は汚れなどで少しぼろぼろになつてあり、顔は御札でわからないが、身体的特徴から若い女性と思えた。

それがわかつた時、浮世は気になつて歩みを止めた。

なぜこんな若い女性が、こんな田にあつているんだ? 一体この者は何者なんだ?

そう考えている内に、さつきのようにもた頭の中に言葉が入つてきた。

助けて・・・私は・・・何も悪い事はしていないの・・・

その言葉が飛び込んできた時、浮世は何の迷いもなく、その者の錠を外そうとした。

だが、恐らくは鉄と思える錠を、何の道具もなく外せる訳がない。

悪戦苦闘するものの、錠はまったく外れそうにない。

浮世は自分の非力を嘆いた。指から血が出てもなお、錠を外そうとした。

何度も何度もやり続ける浮世。その内口から思わず言葉が出てきた。

「くそお・・・外れるよ・・・外れるよおーーー！」

と怒声を出した瞬間、さっきまで傷すらひに付いていなかつた錠が、急に壊れたのだ。

浮世はさすがに驚いたが、それよりも錠が壊れて体勢が悪くなつた

その者を、浮世は地面にぶつかる前に抱き止めた。

自身の手で抱えていても、浮世にはその者からあまり生氣が伝わつてこなかつた。

どれだけ長い間、この人はこいつされていたんだろうか・・・

浮世は、その者の顔についていた御札をゆっくりと外した。

見えてきたのは、浮世から見ても可愛いと思える女性の顔と、はつきりとある・・・額辺りに付いている大きな目であった。

浮世が困惑する中、さっきまで瞼を開じていたその者が、ゆっくりとその瞼を開けた。

その目は生氣と同時に、人間にあるはずの瞳がなかつた。

そしてその者は、弱弱しくも口を開いてきた。

「・・・君が、私を助けてくれたの？」

その言葉に、浮世はとりあえず返事を返した。

「・・・多分そうかな。」

事実、錠が何の前触れもなく壊れた以上、自身が助けたのかわからなかつたのだ。

それでも、その者にとつて浮世は恩人である。

「・・・ありがとう。」

笑顔で感謝の言葉を言われて、浮世は思わず顔が赤くなつた。

「いや、俺は別にその・・・」

わざわざ以上に困惑の浮世にて、その者はこんな事を言つてきた。

「そう言えども、血口紹介が遅れていたね。私の名前は、ダイダラボッチって言ひの。ボッチって呼んでくれたらいいよ。」

その一言に、浮世は変に反応した。

「え？ ダイダラボッチ？ 確か、ある妖怪の名前じゃなかつたっけ？」

その疑問に、ダイダラボッチがすぐさま返した。

「そうだよ。私がそのダイダラボッチだよ。」

その返答に、浮世の頭の中はもつ訳がわからなくなつていた。  
どうにか冷静になつて、浮世はそれとなく今の現状を整理した。

「い、今まであつた事をありのままでまとめるぜ、俺はテレビの中と思つ世界に来て、そんでもつて滝つぼにたどり着いて、助けの言葉が聞こえたから探してみたら、そいつがなんと妖怪だったんだ。」

何を言つてゐるのかわからないだらうが、俺もよくわかつていらないんだ。」

と一人で長々と言つてゐると、ダイダラボッチが浮世にある事を尋ねてきた。

「さう言えば、君の名前は何で言つたの？」

「あ、ああ、俺の名前は人道 浮世って言つんだ。」

「人道・・・浮世かあ。いい名前だね。」

「そ、そうかな？」

少し照れていると、ダイダラボッチが浮世の手からばつと離れ、浮世の前に立つた。

気がつけば、さつきまでなかつた生氣が戻つていたようだ。

「とりあえず、私の声を聞いてくれたのは君だね？浮世。」

「ああ。」

「あれだけで、よく私がここにいるだなんてわかつたね。」

「・・・正直、俺も半信半疑だったけど、何となくここにいるつて気がしたつて言つのかな・・・」

浮世は照れくさうに軽く頭を搔いた。

「さう、まあどうにしても、浮世は私を助けてくれた。浮世には

感謝しているよ。」

そつまつて、すつと浮世に握手を求めてきた。

「はは、どうも。」

浮世も握手で答えた。

握手を解いた後、今度は浮世がダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、何であなたは、あんな事になっていたんだ？」

その質問をした時、ダイダラボッチはつづみき、暗い顔をした。どうやら答えたくないのか、思い出したくないであつた。

浮世はすぐ元の様子を察した。

「・・・答えたくないなら、別にいいよ。」

そつまつと、ダイダラボッチは申し訳なそつな感じで顔を上げた。仕方がないので、浮世は違つ質問をした。

「じゃあ、ここはどこなのか教えてくれないか？」

「・・・君のやつを言つてた事を考えたら、君はたぶん違う世界から来たみたいだね。それなら、この世界自体が何なのか、言っておいた方がいいね。ここは、忘れ去られた者が流れ着く場所、幻想郷つて言つて。」

幻想郷・・・浮世には聞き慣れない言葉であった。だが忘れ去られた者が流れ着くという所から、浮世は田の前にいる者が妖怪である事に納得がいった。

そうか、妖怪は本来俺達の世界にいたけど、今となつてはこの幻想郷つて所に流れ着いていつた訳なんだな。

だがその答えを出したと同時に、浮世は最初から抱いていた疑問を思い出した。

じゃあ、なんで俺は、この世界に来たんだ？

その疑問だけは、どう考えても答えが出なかつた。

浮世はその事について考えるのをやめ、今度はこれからどうするかについて考えた。

だが正直一人でこの事を考えても仕方ないと想い、ダイダラボッちに尋ねてみた。

「ボッち、この辺りに人が住んでいる所はないか？あるなら教えてくれ。」

「うん、わかつた。私についてきて。」

そう言つと、ダイダラボッちはさつき浮世が来た所を先々と進んでいった。

浮世はその後を追いかけていつたのであつた。

## 第一話 大妖怪との出会い（後書き）

### 後書き

どうも、プロローグで書いたとおり、第一話にしても東方キャラが出てきませんでした。

まあ第一話どころか、もつと後で出してる人も普通にいますので、この程度ならまだマシですかね。

これからもオリキャラなど出していくと思いますので、どうか暖かい目でみてやってくださいね。

ちなみにこの話は三人一緒に違つて前に名前とかは書きません。前の分から誰が喋っているか察してくださいな。

では、第一話をお楽しみに。

## 第一話 疑念（前書き）

あつのもまありすじ

彼女に振られた浮世はよくわからず幻想入りし、少し歩いていたら助けを呼ぶ声？がしたので行って助けてみたら、妖怪ダイダラボッヂだつた。そしてその妖怪に道案内してもらつていてる。

## 第一話 疑念

### 第一話 疑念

さつき浮世が歩いた道とは少し違う道を、浮世とダイダラボッチの二人が並んで歩いていた。

一応ダイダラボッチの案内の元、それなりに真っ直ぐな道を歩いていた。

だが浮世自体はさっきまでのダイダラボッチの様子から、道案内に一抹の不安を残していた。

「こいつはちゃんと案内してくれていいのか？」

そんな疑心暗鬼が心の中で浮かんでは消えるを繰り返す内に、浮世は我慢できずに尋ねた。

「ボッち、あなたは本当に道案内をしていいのか？」

その質問に、ダイダラボッチは適当な調子で答えた。

「うん。大丈夫だよ。私、ぼーっとしてるつてよく言われるけど、方向感覚とか記憶力はしっかりしてるんだ。」

そういうながら、自分の頭を手を使ってアピールした。

その様子を見て浮世は、さつきとは違つ、気になった事をダイダラボッちに尋ねた。

「なあ、正直に訊くけど、君は本当に妖怪なのかい？」

疑りの混じつた視線に、ダイダラボッチはまったく動搖せずに答えた。

「・・・助けてくれたお礼もあるし、じゃあ、私が大妖怪ダイダラボッチだって所、特別に浮世に見せてあげるね。」

そう言つた瞬間、人間の大きさであつたダイダラボッチが、容姿が変わりながらどんどん大きくなりだしたのだ。  
目の前で急に大きくなり、さすがに焦つた浮世は、

「ちよちよちよちよお！？わかつたわかつた！―十分わかつたから止めて！―」

と大きくなつていくダイダラボッチに懇願した。

その声を聞いていたのかいざ知らず、ダイダラボッチはあつという間に元の大きさに戻つた。

元に戻ると、少し疲れた様子のダイダラボッチがこんな事を言つてきた。

「よくわかつた？私が大妖怪だつて事。でも本来の姿にはあんまりなりたくないの。疲れるし、みんなにも迷惑かけるし・・・

と言つていると、立ちくらみでも起きたのかふらつとなりだした。  
その様子に浮世は、

「ボッヂ！」

と即座にダイダラボッチの傍に駆け寄り、倒れそくなつてているダイダラボッチを支えた。

「大丈夫か！？ボツチ！！」

呼びかけの声に、ダイダラボツチは静かに答えた。

「大丈夫だよ・・・久々にやつてみたから・・・いつもより疲れただけ・・・」

浮世が助けた時よりも弱弱しい声に、浮世は不安になつた。仮にも見知らぬ世界で始めて会つた他者。それもこんなに弱弱しい姿を見せているのであれば、浮世にとつてはただ不安が募るだけだ。気がつけば、浮世はダイダラボツチを抱えたまま涙を流していた。

「浮世・・・？」

その様子に、ダイダラボツチは不思議そうに尋ねた。  
恐らくダイダラボツチは、浮世が誰の為に涙を流しているのか、わかつていないのであるう。

涙が出ながらも、浮世はダイダラボツチにこんな事を言つた。

「頼む・・・無理だけはしないでくれよ・・・」

さつきとはまつたく雰囲気の違つ懇願に、ダイダラボツチは心を打たれた。

そしてダイダラボツチは、こんな答えを導き出した。

「・・・うん。」

たつたの一言だが、今の浮世にひとつこれほど安らぐ言葉もないだろう。

次第に浮世の顔から涙は消え、元の笑顔が戻つていた。

その間に、ダイダラボッチは浮世の手元から離れ、また元のように二人並んで歩いていった。

並んで歩く中、ダイダラボッチが急に浮世の顔をじっと見てきた。気になつた浮世は、

「な、何だ？俺の顔に何かついてるのか？」

と尋ねた。

その質問に、ダイダラボッチは、

「そうじゃないよ。ただね、浮世って優しい人だなあつて思つただけ。」

と屈託のない、満面の笑顔を浮世に向けながら言つた。

この様子に浮世は、今までで一番顔が赤くなつた。ぼうとした音でも出そつた。

浮世は手と頭を同時に動かし、田を隠して必死に否定した。

「べ、べべ別に、おおお俺はだな、たたたただこんな性格なだけであつてだな……」

あまりにも必死な様子に、ダイダラボッチは思わず笑つた。

「ふふふ、浮世ってわかりやすいね。」

団星をつかれた浮世は、余計戸惑いながらも、びりこか正氣に戻つた。

正氣に戻つた所で、ダイダラボッチは気になつていた事を浮世に尋ねた。

「ねえ浮世。君つてやつせ、どうやって私についてた枷を外したの？」

その質問は、浮世自身もわからない疑問であった。  
わからない以上、浮世は、

「えーっと・・・」めん。俺にもわからないんだ。

少し申し訳なさそうな様子で返した。

その返事に、ダイダラボッチはある仮説を立てて浮世に言つてきた。

「浮世。私が見た感じだけね、枷があんなつてた所から見ると、君はもしかして、能力を持つているのかも知れないんだ。」

その言葉に、浮世の頭の中ではただ疑問だけが浮かんでいた。

「能力?なんだ、能力を持つって?」

浮世の問答に、ダイダラボッチがビシッと答えた。

「能力っていうのはね、この世界にいる者達が持つ事のある、特殊能力の事なの。例えば私の場合なら、妖怪の類とか操る事が出来る能力とかになるの。」

その答えに、浮世は更なる疑問をぶつけた。

「え? さつきのボッチが巨大化したのは?」

その問いにも、ダイダラボッチは軽快に答える。

「あれは妖怪である私の力。能力っていうのはもつと違う物だよ。」

簡潔な答えに、浮世はそれなりに悩みこんだ。  
自分の能力がなんなのか・・・あまり検討がついていないといつてもおかしくはない。

俺は、ダイダラボッチを拘束していた枷をその手で壊した。無意識とはいえそれが能力なのか?

だが冷静になれば、それだけでは能力の断定などできない。  
しばらくして、浮世はとりあえずダイダラボッチに尋ねた。

「ボッち、俺は正直自分の能力が何なのかよくわかつていいないんだ。  
だからボッちに俺の能力を見定めてほしい。」

結構な無茶振りに、ダイダラボッチは、

「うーん、そうだねえ・・・」

と考えこんだ。

じつと考えているダイダラボッチに、答えを急ぐ浮世は落ち着けずにはいられなかつた。

そんな浮世に、ダイダラボッチがこんな答えを出してきた。

「ごめんね。私も出ないの。」

その一言に、浮世はため息と同時に自分を無理矢理納得させた。

まあこれから追々わかるか・・・

そう自分に言い聞かせて、浮世はまた歩き出さのであった。

## 第一話 疑念（後書き）

後書き

えーっと、一人ともほとんど進んでいませんね。ただただ道ばかりで。

でもこれで結構二人の事がわかつたと思います。

次はもっと違う人が出てくると思いますので、是非とも「期待ください。

では、第三話をお楽しみに。

## 第三話 人里（前書き）

ありのままあらすじ

ダイダラボッチに道案内してもらつていた浮世は、ダイダラボッチが本当に妖怪なのか気になつたので尋ねたら、大きくなつて証明してきた。その後ちょっとといい雰囲気になつたが、やっぱり一人は歩くのであつた。

## 第三話 人里

### 第三話 人里

ひたすらに森の道を歩き続ける一人。そろそろ浮世のしびれが切れそうになつた頃、二人の前によつやく木々とは違う物が見えてきた。見えてきたのは、恐らくは多くの人々が暮らしていると思える人里である。

遠くから見た限りでも、活気に溢れ、老若男女が楽しそうに村々を行きかゝっている風景が見えていた。

ようやく他の人がいる場所が見えたとあって、浮世の心には自然と安らぎが訪れていた。

いてもたつてもいられなくなつた浮世は、ダイダラボッちに自分の思いを告げた。

「ボッち。あれつて人里だよな? 長い道のりだつたけど、やつと人がいる所が見つかつたなあ。ほら、急ごうぜボッち。」

ボッちの腕を掴み、その里にすぐにでも駆け出そうとしたが、ダイダラボッちがすぐに動こうとしなかつた。

唐突な行動に戸惑つただなと思つた浮世は、手を放してまた話しかけた。

「『めんごめん、ボッちにはボッちのペースがあるよな。いきなりこんな事されたらそりや戸惑う・・・』

と言いかけた口が、ダイダラボッちの様子を見て閉じてしまった。さつきまでは顔を上げ、笑顔であつたダイダラボッちは、今は顔を

うつむけ、暗い調子でいたのだ。

この様子に浮世は戸惑ってしまった。

なぜ急にこうなってしまったんだ？

そう思つた時、浮世はある答え導き出してしまつた。

もしかしてボッヂは、人里に行きたくないのか？

ここまで来てダイダラボッヂがこんな様子を見せた以上、このよう  
な答えを導き出すのは自然であろう。

しかし、？浮世にとつては困つた事である。

浮世は違う世界にいる以上、この世界に知り合いなどいない。  
何も知らないまま人里に入るの、さすがの浮世も困る。

考えた浮世は、落ち込んだ調子のダイダラボッヂに尋ねてみた。

「ボッヂ、正直に聞くよ。ボッヂはあの人里に入りたくないのか？」

その問いに、ボッヂはうつむいたまま答えた。

「・・・私だつて、人里に入りたいよ。でも、あの人里にいる人達  
が、私を受け入れてくれるかわからないから、怖いの・・・」

不安のこもつた声に、浮世は全てを察した。

そうだ、ダイダラボッヂは妖怪なんだ。それもただの妖怪じゃない。  
さつきまであんな所に貼り付けにされていたような大妖怪なんだ。

どうしようもない現実を再確認した浮世。

だが、それに対し浮世はダイダラボッヂにこう言い放つた。

「大丈夫だ。ボツチは悪い妖怪じゃない。それは俺がよくわかつて  
る。だから、俺がそばにいれば大丈夫だ。それに、黙つていればば  
れないと。」

その言葉に、ずっとうつむいてたダイダラボツチが顔を上げた。

「・・・信じていいの?浮世の事。」

不安と希望が混ざったようなダイダラボツチの声と顔に、浮世が軽  
快に答えた。

「ああ。信じてくれよ。」

俺に任せると言わんばかりの様子に、ダイダラボツチの顔から不安  
が消え、希望だけが残っていた。

ダイダラボツチは、残った希望を声に乗せて浮世に言つた

「うん。」

浮世もその言葉から察したのか、何も言わず二人は人里へと歩い  
ていった。

少しして、一人は人里の入り口と思える所へと着いた。  
行きかう人々、活気のある町並み。遠くから見ているだけでは伝わ  
らないこの感覚を、一人は全身で感じ取っていた。

その感想を、ダイダラボッチが思わず口にした。

「うそ、一人つきつもいこけど、やつぱり賑やかのが一番だね。」

深くは考へてはいないと思える発言に答えるよつて、浮世も言った。

「あ、ああ。」

浮世は内心少し複雑になつた。それでも町並みを眺める内にそれもなくなつていた。

じつと町並みを眺める一人、じぱりくして、浮世がダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、ボッチ。とりあえず来たのはいこけど、まあどうある?」

「やうだね・・・やうと町並みを見てこりひよ。」

ダイダラボッチの提案に、浮世はすぐ「乗つた。

「じゃあ、やうじようか。」

そして二人は、そのまま人里を歩き始めた。

歩けば歩くほど、一人はその町並みの良さを感じ取つていった。ふと、ダイダラボッチが村にある一つの店を指差した。見た限りでは団子屋のようだ。

「ねえ浮世、ちよつとあわいで団子食べようよ。」

隣にいる浮世の服をまるで子供のよつて引っ張りながら言った。違う方向を見ていた浮世は、その店を見てから答えた。

「それもいいな。」

「じゃあ、行こうよ。」

「ああ。」

店へと向かっていく一人。その時浮世がある事に気づいた。

あ、冷静に考えたら俺、金あつたつけ？

ポケットに手を入れてみたが、何も入ってはいなかった。  
焦った浮世はその事をすぐにダイダラボッチに言った。

「ボッち！－ごめん、俺金ない！－！」

謝る浮世に、ダイダラボッちはすぐに返事をした。

「大丈夫だよ。私がいくらか持ってるから。」

そう言つて、浮世にそれらしい物を見せた。  
それを見た浮世は、思わず声が漏れた。

「え？」

驚きと呆然が混ざったような調子の顔になつた。

そもそもそうである。何せそれは浮世にとつて見慣れない、昔のお金だったのだから。

呆然として考えた後、浮世はダイダラボッちに不安そつに尋ねた。

「なあ・・・それって使えるのか?」

その問いに、ダイダラボッチは呆れた様子で答えた。

「何言つてゐるの浮世? これははれつてしまつたお金だよ。」

「いや、でも古くないか?」

「古こ? これが今のお金だよ。」

その一言が、浮世を更に混乱させた。

しまじくして浮世は、こゝが違つ世界であつた事を思い出し、それが恐ろしくは原因だと自分を納無理矢理得させた。

「ああ、『めん』『めん』。ここじゃそれが普通なんだな。」

疑念を抱いたダイダラボッチに対し、浮世は言った。  
ダイダラボッチは不思議そうな感じで見ていたが、どうでもよくなつたのか何も言わずに団子屋へと歩いていった。浮世も後を追うように歩いていった。

一人は外の椅子に座り、町並みを眺めながら団子を食べていた。  
団子を食べながら、ダイダラボッチは、

「おこしいね、浮世。」

「ああ。」

と言つてきたので、浮世も食べながら返した。

返した矢先に、ダイダラボッチがこんな事を言つてきた。

「でも、一人じゃ多分そんなにおいしくなかつたかもね。こうして誰かと食べてるから、本当においしいと思つむ。」

そんな言葉に、浮世は少し戸惑つた。

「や、そりやそうだな。一人で寂しく食べてるよりはこいつして一人で食べてる方が・・・」

と言つていると、ダイダラボッチの方に村の男と思える者が詰め寄つてきた。

その者は、ダイダラボッチをじぱりと見た後、こんな事を言つてきた。

「お、君つてよく見たら・・・」

と言つぱりとしていた時、浮世の中で少しの不安があつた。

もしかしてこいつ、ダイダラボッチが妖怪である事に気づいたのか?

だがそんな不安は、男の続けた言葉からすぐになくなつた。

「結構かわいいじゃん。もしかして、君つて今一人?」

どうやらどうにでもいるただのナンパ男だつたようだ。

浮世はほつと一安心した後、ちょっとだけ違う不安をよみがらせた。浮世はそばにいていたからこそ思つていた。ダイダラボッチは浮世からだけではなく、全般的に見てかわいいと思われていたようだ。

「のまま」のナンパ男の誘いに乗るとは思えないが……

浮世が変な心配をして見てみると、ダイダラボッチがナンパ男にこう返答した。

「『めんなさい』今は一人じゃないの。」

「へえ、じゃあ誰といむの?」

と尋ねると、ダイダラボッチはとつて浮世の腕を両手で掴んで答えた。

「『』の人。」

これみよがしな様子に、ナンパ男は何も言えずにそのままその場を後にした。

去つていつた後、ダイダラボッチがほつとした様子を見せた。

「わかつてくれたみたいだね。よかつたあ。」

と言つている隣で、浮世がひたすら戸惑つていた。

掴まれた腕には、よく見たらダイダラボッチの大きな乳房が少し当たつていた。

「ボボボボッчиい? ななな何のつもりで、こーこーこんな事やつたんだあ?」

パンクする浮世に、ダイダラボッチはひょうひょうとした様子で答えた。

「え？ だつてあつこのまゝいつて見せ付けた方が早いと思つたんだもの。」

「そそそそれにしておだな、いいにこきなつと聞つのは、やれやれすがにだな・・・」

真つ赤な顔で忠告しようとする浮世に、ダイダラボッチが不満そうな顔をして言つてきた。

「・・・浮世は、私といつじるの、嫌なの？」

そんな問い合わせして、浮世はオーバーヒートしたかのよつぱたんと倒れてしまった。

その様子に、ダイダラボッチは驚き、すぐさま浮世の元に駆け寄つた。

「浮世、どつしたの急に？ 浮世～。」

耳元で呼びかけても、目が回つたような顔をしている浮世は起きやうにない。

困り果てていると、近くから誰かの声がした。

「あら？ 誰か倒れているわね。」

ダイダラボッチが声のする方に振り向くと、そこには頭に十字のマークのついた帽子を被り、赤と青がくつきりと分かれた服を着ていた長身の女性がいた。長い髪の毛は後ろで束ねていた。

ダイダラボッチは、誰かもわからない以上、まずは名前を尋ねた。

「あなた、誰なの？」

「私？私の名前は、八意 永琳。これでも医者よ。」

「お医者さん？」

「ええ、せつかくだから、そこに倒れている子を診てあげるわ。」

そう言いながら、倒れた浮世の傍に駆け寄った。  
しばらく様子を見る永琳。心配になつたダイダラボッチが尋ねてきた。

「あの・・・どうなの？治りそつなの？」

その問いに、永琳が逆に尋ね返した。

「あなた、この子が倒れる前はどうしてたの？」

「えーっと、私と浮世は一人つきりでいたんだけど、面倒臭そうなのが来たから追い払おうと浮世の腕を掴んで、こいつしてるのって嫌つて言つたら、急に倒れたの。」

間違つてはいな報告に、永琳は少し呆れた様子を見せた後、ダイダラボッチにこう言つた。

「そうね、どこか休めそつ所を見つけて、この子を休ませてあげて。それから、あまりこの子にべたべたしそぎないようにね。」

と言い残して、永琳はその場を後にした。  
残されたダイダラボッチは、

「・・・休めそつな所つて、せつぜんあそひだよな。

と聞こながら、浮世を描いて行つたのであつた。

## 第三話 人里（後書き）

後書き

ペースとか考えてません。それがこれですよ。

とりあえず東方キャラ第一弾として、永琳を登場させてみました。  
かなりサブ的な感じがちょっととまづかったですね。

最初に言いましたけど、これは本当にやりたかつただけが集合しているので、正直うえつてなる所もあるかもしれません。

それもでついてきてくれるみなさんに、本当感謝しています。

それでは、次はどうなるかはわかりませんけど、第四話をお楽しみ  
に。

## 第四話 宿（前書き）

あつのもありますじ

歩き続けて人里についた一人は、町並みを眺めた後に団子屋でゅつくつしてたら田障りなのが来たのでダイダラボッチが見せ付けたら、浮世がばたんわゆ～して、永琳が気休めの診断を出した。

## 第四話 宿

第四話 宿

「・・・ん？」

浮世が目覚めた時、浮世はどこかもわからない部屋の布団に寝ていた。

とりあえず体を起こしてどうなっているのかを確認した。  
部屋の間取りは畳が六畳ほどで、無地の襖と窓があった。  
確認した後、浮世は自分がなぜこうなったのかを思い出そうとしていた。

確か・・・ボツチが俺の・・・腕を・・・

と思い出そうとした矢先に、浮世の頭は煩惱で一杯になつた。そしてまた顔を真っ赤にした。

浮世はそういう事に關して、ほとほと弱い男のようである。  
電池の切れたおもちゃのようにただぼーっとしていると、ダイダラ  
ボツチが襖を開けてきた。

「やつと起きたの? 浮世。」

襖から覗くよつて浮世に尋ねた。

声が届いてないのか、浮世は今だにぼーつとしている。

様子がおかしいと思つたダイダラボツチは、浮世の田の前に立ち、  
浮世の顔をじつと見た。

顔を真つ赤にし、心こころあらすな浮世に、ダイダラボツチはびつ

しようかと考えた。

しばらくして、ダイダラボッチは、浮世のテロに軽くテロピンを放つた。

ビシッとした音とともに、浮世は田を見ましたようだ。

「いたつー。」

軽いリアクションを取った後に、浮世はすぐさま自身のテロを手で覆つた。

突然の事に戸惑いながらも、浮世はどうにか目の前に立つて居るダイダラボッチの存在を確認した。

そしてテロの痛みから、浮世は犯人が誰なのかすぐさま判断した。

「い、いきなり何するんだボッチ！？」

ちょっと怒った様子でダイダラボッチに尋ねると、ダイダラボッチは、

「だつて、浮世つたら声をかけても起きないんだもの。だから実力行使に出ました。」

と言ひながら、笑顔でテロピンを放った指を浮世に見せ付けた。この様子に浮世は、

「実力行使つて・・・今時テロピンはないだろ・・・」

と呆れた様子で軽いため息と共に肩を落とした。

そんな事など構いなしに、ダイダラボッチが浮世に尋ねてきた。

「ねえ浮世、なんでもうつき、体を起こしたままぼーっとしてたの？」

その疑問に對し、浮世せよつき思い出していた事をまた思い出した。

「 そうだ、俺が意識を飛ばしていた理由は・・・

その理由に到達した時、浮世の田線はダイダラボッチの大きな乳房にいつていた。

それが少なからず原因である以上は、田線がいつても仕方ないだろう。

それでも、ダイダラボッチからしたらさすがに様子がおかしいと思ふだらう。

「 浮世っぽ、聞いてるの？」

浮世に再び尋ね返すと、浮世は驚いた様子で反応した。

「あ、ああ。」めん・・・またぼーっとしてて・・・

頭をかき、申し訳なさそうな様子でダイダラボッチに言った。  
その様子にダイダラボッチは、

「・・・まあいいや。そんな事聞いても仕方ないもんね。」

と察した様子で浮世に言った。そのままダイダラボッチは話を続けた。

「 それから、浮世に言つておくね。さつき浮世が倒れた時に、たまたまお医者さんがそこを通つてくれて、浮世はとりあえず休んでたら大丈夫なんだって。後、いじは村の宿の宿泊部屋だからね。」

「

と懇切丁寧に、浮世に説明をした。

それを聞いた浮世は、それまでの疑問を全て納得させ、とうとうず一安心した。

そんな様子の浮世に、ダイダラボッチがこんな事を言つてきた。

「あ、やつ言えば私もお医者さん」「こんな事言われてたんだ。」

その一言に、浮世は思ひちら見当違ひの不安をよみがせた。

「まやか・・・ボッチの身に何かあったのかー?」

と真剣な眼差しで言つたが、当のダイダラボッチはのんきな調子で答えた。

「いや、一応私の事なんだけど、浮世が関係してゐる。」

「俺が関係してこらへどつこう事だ?言ひてられ。」

「うふ。えーっとね、浮世にあんまりべたべたしねや駄目だつて言われたの。」

その一言に、浮世は思わずえーっとでも言つてこらるかのよつたな顔になつた。

「や・・・そんな事?」

浮世自身はもつと深刻な事態かと思つていたらしいが、これでは肩透かしもいいところである。

そんな事は露知らず、ダイダラボッチは軽い調子で答えた。

「うん。」

その一言によって、浮世は落胆と安心が混ざったような事態に陥つた。  
しばらくして浮世は、枕にまた頭を乗せて軽いため息を吐いた。  
がっかりとした様子ではあるが、浮世の内心は安心の方が大きかつた。

とにかく、ボッヂは大事には至つてなかつたんだな。

その思つた浮世の顔は、いつもの笑顔に戻つていた。

笑顔に戻つた所で、ダイダラボッヂがこんな事を尋ねてきた。

「ねえ浮世、聞きたい事があるんだけど。」

「何だ?」

「・・・べたべたするつて、何?」

その質問に、浮世は思わず戸惑つた。ダイダラボッヂがその事を知らなかつた事と、その事を言わなければならぬ一つの意味合いでよつてだ。

浮世はどう言おうかと迷つた。と言うか言うべきなのかすら迷つた。悩みに悩んだ末、浮世がダイダラボッヂに答えを教えた。

「・・・あのは、べたべたするつていうのは、恋人同士がするような事を指すんだ。俺とボッヂは恋人同士じゃないから、そんな事をするのはおかしいんだ。」

合つてこりののかよくわからない答えに、ダイダラボッヂは、

「なるほど。だから浮世は、いきなり倒れたりしたんだね。」

痛い所を突く様に答えた、

「・・・とにかく、これから過度のスキンシップは控えるように。」

教えるような感じで、ダイダラボッチに叫んだ。

「はーー。」

ダイダラボッチは子供のように素直な返事をした。  
返事をした後で、浮世がダイダラボッチに尋ねてきた。

「なあボッち、今の時間はどうなってるんだ？」

その問い合わせて、ダイダラボッチは、

「えーっと・・・ちょっと待ってね。」

そう言いつと、ダイダラボッチは立ち上がり、おもむろに部屋の窓を開けた。

窓を開けると、そこから綺麗な夕日が部屋に差し込んできた。

「もう夕方みたいだね。」

わかりきった答えに、浮世は、

「やつだな。」

とよくわかつたとでも言ったそつな顔で答えた。  
そして浮世が、続けてこんな事を言つてきた。

「じゃあ、今日はとりあえずここに泊まるとするか?」

浮世の問ひに、ダイダラボッちは、

「大丈夫だよ。この部屋でもう決めてるから。」

とわかりきついていたかのように答えた。  
その答えに浮世は一安心した後に、ある疑問をダイダラボッチにぶつけた。

「・・・ボッち、今この部屋つて言つたけど、もしかして粗部屋なのか?」

その問いに、ダイダラボッチは、

「うふ。もちろん浮世と一緒にだよ。」

と少し嬉しそうな様子で答えた。

その答えに浮世は開いた口がふさがらなくなつた。

「え?え?ええええー?マジで言ひしるのかー?」

焦る浮世に、ダイダラボッチは、

「だつて、そうじゃないと部屋代とか無駄になるでしょ?一人ならこの広さで十分だよ。」

「いやいや！俺が突っ込んでるのはやうこじとこじやなくてだな、男と女が同じ部屋と屋根の下で一人つきりつてのはさすがにまずいと・・・」

と言いかけた時に、浮世の言葉が思わず止まってしまった。

なぜなら、ダイダラボッチがぽろぽろと涙を流していたからだ。

「・・・なんでよ、なんで浮世はそんなに私といたがらないの？私の事が嫌いなの？私と一緒にいるのが嫌なの？教えてよ・・・ねえ・・・」

涙で崩れ去ったダイダラボッチに、浮世がダイダラボッチの頭をなでてきた。

「・・・俺がボッチの事、嫌いな訳ないだろ？違うよ。ただ俺達にはまだ早すぎるだけだよ。わかつてくれないか？」

浮世の一言に、ダイダラボッチは顔を上げて、小さくうなずいた。うなずいた後で、ダイダラボッチが小声で浮世に尋ねてきた。

「・・・同じ部屋じゃ、駄目なの？」

その間に、浮世は、

「そうだな。宿代がもつたいないから、それぐらいはいいか。」

浮世の那一言で、ダイダラボッチは普段以上の笑顔になった。その顔にはもちろん、涙は流れていなかつた。ただ笑顔だけであつた。

## 第四話 宿（後書き）

後書き

さすがはやりたかつただけでありますね。半端じゃありませんねこのノリ。

ここまで付き合つてくれている強者はどうぞうござるんでしょうか。本当に色々なやうな事。

これでも本人は眞面目にやつているんですよ。本当にですよ？

三人一緒にと違つて本当ゆづくつですね。遅すぎるぞうございますかね？

更新はあくまで不定期ですので、これからもそれでお願いします。

あ、その事で一言ありました。三人一緒にも読んでくれている人なら気付いているかもしれませんけど。

これから更新ですけど、あくまで不定期ですが土曜日の晩から夜にかけて一応定期更新をする事にしました。

なので、これからはそれを一応の日安としてください。

それでは、第五話をお楽しみに。

## 第五話 夜の来客（前書き）

ありのままあらすじ

意識を失った浮世をダイダラボッチが宿で寝かせ、浮世が起きた後で一人がちょっともめたけど、少しいい雰囲気になった。

## 第五話 夜の来客

### 第五話 夜の来客

話し合いが終わり、時間的にはもう夜になってきた。

浮世はとりあえずトイレに行こうと思いつつ、ダイダラボッチに一言断つてから廁へと急いだ。

用をたし、浮世は手を洗いながら、ふとこんな事を思っていた。

それにしても・・・この村はあまりにも古すぎる気がするな・・・

ダイダラボッチが使っていた金銭は別にしても、これは年代的にあまりにも古すぎる。

いくら田舎だと言えども、これまで浮世との世界との年代差があるのは妙な事である。

仕方ない、後でボッチにちょっと聞いてみるか。

そう思い立った浮世は、廁から出て廊下を歩き出した。浮世が長い廊下を歩いていると、浮世が突然廊下の何もない所に体をぶつけてしまった。

それなりにリアクションを取った後で、浮世は自分の身に起きた不自然な出来事に困惑した。

浮世の目の前には何もない。しかし、浮世は確かに何かにぶつかった。

不思議に思った浮世は、ぶつかったと思える所をそつと触りつつすると、今度は後ろから自身のズボンが引っ張られた。

引っ張られたとは言つても、大した力ではなかつたので、浮世はと

りあえず後ろに振り向いた。

そこにいたのは、頭巾か被り、背丈は浮世の腰辺りと思える幼女であった。ズボンを引っ張ったのはどうやらその子のようである。

「……この宿に住んでる子か？」

そう思いつつ、少し戸惑いながらも、浮世はしゃがんで目線に合わせてから、その子に話しかけた。

「えーっと、何の用かな？」

笑顔で尋ねる浮世に、その子はなぜか何も言わなかつた。ただだんまりを決め込んでいる。

不自然に思つた浮世は、またその子に尋ねた。

「俺の言つてる事、わかる？」

浮世がそういうと、その子は一言も喋らざつこつなずいた。  
その様子から、浮世はこの子が何か理由があつて喋れないのかと判断した。

そう思つた浮世は、その子にこんな事を言つた。

「じゃあ、何か伝えたい事があるなら、身振りとかで教えてくれないか？」

そう言つと、その子はさつきと回じよひこうなずいた。  
それを確認してから、浮世はさつきと回じよひこうなずいた。

「で、何の用かな？」

と言つと、その子は浮世がわざをお願いした通り、身振り手振りで教えてきた。

浮世はとうあえずそれを口に出して確認していくた。

「えーっと、私は・・・人を・・・探している・・・その人の特徴は・・・額に大きな目をしていて・・・髪が長くて・・・ぱーっとしてて・・・胸が大きい・・・だね。」

と浮世が確認を取ると、その子はまたうなずいた。

口に出して確認していくた浮世は、その子が尋ねたい事をまとめた。

「うーん、この子はどうやら誰かを探しているみたいだな、特徴が確か・・・」

と思い出すとした瞬間、浮世は真っ先にある者を思い出した。

待てよ・・・この子の挙げた特徴を全部足すと・・・あにつしかいないじやないか。

と思いつ立つた浮世は、その子に探し人が誰なのかを訪ねた。

「なあ、君が探ししているのって、もしかしてダイ・・・」

と言おうとしたその時、一度浮世の後ろから、ダイダラボッちがゆっくり歩いてきた。

「あ、浮世。廁が長いから私、部屋を出・・・」

と言いかけた時に、浮世と話していた子が、突如ダイダラボッちに飛び込んできていた。

「わわわっ！」

突然の事に慌てるダイダラボッチだが、その子はびつにか自分の胸元で受け止めた。

受け止めた後で、ダイダラボッチはその子が誰なのか確認しようとした顔を見た。

その瞬間に、ダイダラボッチの表情が突如変化した。

「・・・ぬうちゃん？ぬうちゃんだよね？そりだよね！？」

何度も確認をするダイダラボッチに、その子、つまりぬうはただうなずいた。

「こんな所で会えるなんて、思つてもなかつたよ、ぬうちゃん。」

懐かしさと嬉しさの混ざつた調子で言つていると、ぬうがダイダラボッチにぎゅっと抱きついてきた。

恐らく、長い間ダイダラボッチと会えなかつた寂しさから、自然とその行動をしているのである。

嬉し涙を浮かべて抱きつくなつて、ダイダラボッチはぬうの顔をただじつと見つめた。

二人のその様子は、さながら母と子のようであった。

そんな様子が続いている内に、すつかり外野状態の浮世が、気まずそうにダイダラボッチに尋ねた。

「ボッち・・・その子って、一体何なんだ？」

と言つと、ダイダラボッチが浮世の方を見てから答えた。

「 いの子はね、私の友達のぬいぢやんつて血つの。これでもいの子、塗り壁つて妖怪なの。」

と説明するダイダラボッチに、浮世はまた尋ねた。

「 塗り壁？ その子がそなのか？ とてもそなは見え・・・」

と言つてこると、浮世は背中に何かがぶつかったような感覚に襲われた。体がぐらつとなり、慌てた浮世はすぐさま後ろに振り返った。

そこにいたのは、これまでに塗り壁と言わんばかりの者が立っていた。

言葉を失つ浮世を尻目に、ダイダラボッチがその壁に話しかけた。

「あ、ぬいぢやんがいるから、やつぱりかあ君もいたんだね。」

とまるでいたのが当然かのように、その壁、すなわちかあが口もないのに口を開いてきた。

「 かあとぬいは一心同体。かあいなれば、ぬいはこられない。また、ぬうがになれば、かあもこられないと。」

と随分硬い調子で返してきた。

言葉を失つていた浮世は、そろそろ我に返り、そのままダイダラボッヂにまた尋ねた。

「 ほ、ボッヂ? 」、「 いの壁つて・・・」

と浮世はかあを指差して尋ねた。

ダイダラボッヂはさつきと同じ調子でまた言つた。

「うそ、その子も、私の友達のかあ君。多分浮世の壁に塗つ壁つてイメージは、かあ君の方だね。」

と察した調子で言った。

「まあまあ・・・」

と浮世は今だに口悪いながらも、ビックリ返事をした。  
その時に、浮世の後ろでかあが浮世に話しかけてきた。

「お兄ちゃんはわかつたか？」のかぶつかつたか？

と尋ねられた浮世は、身に覚えがないと思いつつ、せつしあつた事を思い出していた。

せつしあ、浮世は確かに田に見えない壁にぶつかつた。しかし、今田の前にいるのは紛れもなく田に見えていた。

その事から、浮世はあつた事をそのままかあに語つた

「えーっと・・・わたくし、見えない壁にならぶつかつた記憶がある  
けど・・・」

と云つて、かあが体の端についている手を浮世の肩をぽんと叩いて  
あた。

「それはまさしく、かあの事だ。」

と言つて、浮世は疑問をそのままかあにぶつけた。

「え？ 今の君は見えてる気がするけど・・・」

と晒つと、かあせ血膿が語つて来た。

「かあは、姿を隠す事ができるのだ。だから、お兄さんせさしきがあにぶつかつたのだ。それはつまり、かあの思惑通りなのだ。」

と言われて、浮世が戸惑つてゐる内に、ダイダラボッチが後ろから浮世に話しかけてきた。

「浮世、塗り壁つて妖怪はね、自分の企みとかがうまくいくと喜ぶ妖怪なの。だから、かあ君は今喜んでるのよ。」

と言われた浮世は、わざわざまであつた疑問とともに、それまであつた事に全て合点がいつた事を血膿で確認した。

そうか、これが妖怪つて物なのか。

浮世はただ、田の前にいる妖怪と、それが持つ属性に感心した。そして浮世は、とりあえずダイダラボッチにある事を尋ねた。

「ボッヂ、この子達は、これからどうするんだ?」

と言われて、ダイダラボッチは、

「そうだね、せっかくだから、私達の部屋でみんなで泊まる事にしてない?あの部屋なら、むづちやんやかあ君も寝られると思つ。」

と浮世に返した。

そつと言われた浮世は、

「・・・それはいいんだけど、この子達はどうなんだ?」

と尋ねたので、ダイダラボッチがむうとかあの一人?に、  
「あのね、むうちゃんにかあ君、これから私はこの宿の同じ部屋で寝泊りするんだけど、一人はどうかな?一緒に寝泊りしない?」

と一人に尋ねた。

むうはダイダラボッチに対して黙つたうなずき、かあは、  
「むうがいいなら、かあもいい。」

と答えた。

「じゃあ、晩御飯を食べた後に、みんなでお部屋に行きましょう。」

と言つた後、ダイダラボッチは道案内でもするかのように、晩御飯が用意されている所へと歩いていった。

他の三人も当然ダイダラボッチへとついていった。

廊下を歩いている時に、浮世がふとある疑問を抱いた。

冷静に考えたら・・・かあ君つてどうやって襖を超える気なんだ?

そう考えてから浮世は、後ろをゆっくりと歩いているかあに目を向けた。かあの大きさはどう見繕つても天井ぎりぎりの大きさである。浮世にじつと見られたのが気になつたのか、かあが口を開いてきた。

「どうしたんだ、浮世お兄さん。かあの体がおかしいか?」

「いや、おかしいと言つたか……正直に言つて、君はやつぱりして裸とかを超える気なんだい？」

疑問をそのままかあにぶつけと、かあは鼻で笑つてきた。

「それなら大丈夫だ。かあは大きさも変えられるのだ。これは普段の大きさよりも小ささいのだが、もつともつと小さくもなるのだ。せつかくだから、浮世お兄さんに見せてあげよう。」

と言つと、かあは天井までの高さから、浮世と同じくらいここまで縮んだ。

その様子を見た浮世は、ただ納得するしかなかつた。

食事が終え、浮世達は寝泊りする部屋にて就寝していた。

現代とは違い、一つのろうそくの小さな光だけが、全員が布団で寝ている部屋を照らしていた。

恐らく全員が寝静まつたと思えた時、浮世だけはどうも寝られない様子を見せていた。

浮世が寝られない理由……それは、今の自分がなぜこんな世界にいるのかと言う疑問であった。

浮世にとって、まったく見慣れない世界。所々が浮世にとって、勝手が違つていた。

それでも浮世は、「この世界が自分の世界より恐らいくらい世界だと思っていた。

その理由は、この村の人々の暖かさである。

自分のいた世界ではどんどん失われている人情。だが、この世界はあまりにも人情で溢れていた。

それが浮世にとつては、とても喜ばしい事であつたらしい。そんな事を思つてゐる内に、浮世もまた睡魔に襲われ、皆と同じようく眠りについた。

自分がなぜこの世界に来たのか、知るよしもなく、深く思う事もなく

く・・・

## 第五話 夜の来客（後書き）

後書き

ええっと、とりあえずここにちわ。

ペースは友達からも言われましたけど、相変わらずゆづくです。  
まあ勘弁してくださいな。とりあえず一日目は終わりましたよ。

今回から新キャラとして、塗り壁妖怪「ンビ」のぬうと、かあつの  
を出してみました。前の由来とかはまあまんます。

むつはキャラ的に当然なんですが、かあも一応精神は子供って事  
を覚えておいてくださいね。

てか、かあつて読みにくいでしょ。まあ仕方ないんですけど。

ここのだけの話ですが、塗り壁つて本当ほんの話のぬうみたいな妖  
怪じこですよ。眉唾ですが。

後、わしは食事のシーンとかほとんど書きませんので、それも気持  
ち覚えておこしてください。

では、第6話をお楽しみに。

## おじり

お知らせ

これからのおじりの小説は、バクテリアではなく、澄田のアカウントで投稿させていただきます。

なので、おじりの方は事実上の凍結とさせていただきます。  
あ、心配しなくても大丈夫ですよ？あくまでアカウントが変わる以上、そつちに移転しなければならないだけなので、これからも澄田の小説はしっかりと投稿していきます。

なので、質問や評価やレビューをお気に入り登録などは、おじりの方でお願いします。

お手数をおかけして、真に申し訳ございませんでした。 m(—) m  
これからのおじり澄田に、是非ともご期待ください (#^\_\_^#)  
や、少し時間がかかりますので、それまでお待ちくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5902n/>

導かれし者が幻想入り lock pass meseege.

2010年10月27日01時43分発行